

- 1 人生に効く古典文学(二)「平家物語」「太平記」
- 2 ●今日の「人生に効く」処方箋
- 3 諸行無常、おごる、運・命・時、弱者の戦略など
- 4 あわいの時代の文学
- 5 『平家物語』 平安時代と鎌倉時代の「あわい」全12巻
- 6 『太平記』 鎌倉時代と室町時代の「あわい」全40巻
- 7 ●『平家物語』
- 8 祇園精舎
- 9 祇園精舎の鐘の声、諸行無常の響あり。沙羅双樹の花の色、盛者必衰の理をあらはす。
- 10 おごれる人も久しからず、唯春の夜の夢のごとし。たけき者も遂にはほろびぬ、偏に風の前
- 11 の塵に同じ。(巻第一 祇園精舎)
- 12 「行」五蘊「色受想行識」の「行」。「色」は存在。
- 13 「受(vedana)」は「知る」の語根「vid」の使役名詞で感受する認識作用を言います。
- 14 「想(sañña)」は「知る」の語根「jña」に集合(samj) ↓全体的なイメージとして知る。
- 15 「識(vijñāna)」は語根「jña」にふたつに分ける「vi」がついて「分けて」知ること。
- 16 「行(samskāra)」は、深層意識
- 17
- 18 橋合戦
- 19 橋の両方のつめにう(ッ)た(ッ)て、矢合す。
- 20 宮の御方には、大矢の俊長、五智院の但馬、渡辺の省、授、続の源太が射ける矢ぞ、鎧もか
- 21 けず、楯もたまらずとほりける。源三位入道は、長絹の鎧直垂に、しながはをどしの鎧なり。
- 22 其日を最後とや思はれけん、わざと甲は着給はず。嫡子伊豆守仲綱は、赤地の錦の直垂に、黒
- 23 糸威の鎧なり。弓をつようひかんとて、これも甲は着ざりけり。

- 1 ここに五智院の但馬、大長刀の鞘をはづいて、只一騎橋の上にぞすすんだる。平家の方には
- 2 これをみて、「あれ射とれや者共」とて、究竟の弓の上手どもが、矢さきをそろへて、さしつ
- 3 めひきつめ、さんざんに射る。但馬すこしもさわがず、あがる矢をばついくぐり、さがる矢を
- 4 ばをどりどりこえ、むか(ツ)てくるをば長刀でき(ツ)ておとす。かたきもみかたも見物す。
- 5 それよりしてこそ矢切の但馬とはいはれけれ。

6
7 富士川の合戦(前例主義、運と命と時)

8 (参考)『保元物語』より

- 9 「合戦のやうは、いかがあるべし」と、左大臣(藤原頼長)、仰せられければ、(源)為朝、かしこ
- 10 まつて申しけるは、「幼少より九国(くこく)に居住つかまつりて、大事の合戦つかまつること、二
- 11 十余度なり。あるいは敵を落とすに勝つに乗ること、先例を思ふに夜討にはしかじ。(略)」と、言
- 12 葉を放つて申しければ、「為朝が計らひ、荒儀なり。憶持なし。年の若きによる。夜討なんどいふこ
- 13 とは、十、二十騎の私事(わがくし)と)にこそあれ。さすが主上・上皇の国を論じ給ふに、夜討、
- 14 しかるべしとも覚えず。(略)」
- 15

- 16 大將軍権亮(ごんのすけ)少將維盛、坂東の案内者として、長井の斎藤別当実盛を召して、「や
- 17 や実盛、汝ほどの強弓、精兵、八ヶ国にはいかほどあるぞ」と問ひ給へば、

- 18 斎藤別当あざ笑つて、「さ候へば、君は実盛を大矢と思し召し候ふか。わづかに十三束をこそ
- 19 つかまつり候へ。坂東に大矢と申すぢやうの者の十五束におとつて引くは候はず。弓の強さも、
- 20 したたかなる者の五六人して張り候ふ。かかる精兵どもが射候へば、鎧の二三領をも重ねてや
- 21 する射通し候ふなり。大名一人と申すは、勢のすくい नाहीぢやう五百騎におとるは候はず。馬
- 22 に乗つたれば落つる道を知らず、悪所を馳すれども馬を倒さず。戦はまた、親も討たれよ、子
- 23 も討たれよ、死ぬれば乗り越え乗り越え戦ふ候ふ。西国の戦と申すは、すべてその儀候はず。
- 24 親討たれぬれば孝養し、忌みあけて寄せ、子討たれぬれば、その思ひ歎きに寄せ候はず(略)」
- 25 と申しければ、これを聞く兵ども、皆震ひわななき合へり。

- 26 さるほどに、十月二十三日にもなりぬ。あすは源平、富士川にて矢合せと定めけりけるに、
- 27 夜に入つて、平家の方より源氏の陣を見渡せば、伊豆、駿河の人民百姓らが、戦に恐れて、或

1 いは野に入り山に隠れ、或いは船にとり乗つて、海川に浮かび、営み（煮炊き）の火の見えけ
 2 るを、平家の兵ども、「あなおびたたしの源氏の陣の遠火の多きよ。げにもまことに野も山も、
 3 海も川も皆かたきでありけり。いかがせん」とぞ慌てける。

4 その夜の夜中ばかり、富士の沼にいくらもありける水鳥どもが、何にかは驚きたりけん、一
 5 度にぱつと立ちける羽音の、大風・雷なんどのやうに聞こえければ、平家の兵ども、「すはや、
 6 源氏の大勢の寄するは。斎藤別当が申しつるやうに、さだめてからめ手も回るらん。取り籠め
 7 られてはかなふまじ。ここをば引いて、尾張川、洲俣を defence や」とて、取る物も取りあへず、
 8 我先に我先にとぞ落ち行きける。

9 あまりに慌て騒いで、弓取る者は矢を知らず、矢取る者は弓を知らず、我が馬には人に乗ら
 10 れ、人の馬には我乗り、或いはつないだる馬に乗つて馳すれば杭を廻（めぐ）る事限りなし。
 11 その辺近き宿々よりまかへ取つて遊びける遊君、遊女ども、或いは頭（かしら）蹴割られ、或
 12 いは腰踏み折られて、をめき叫ぶ事おびたし。

13 あくる二十四日卯の刻に、源氏の勢二十万騎、富士川に押し寄せて、天も響き大地もゆるぐ
 14 ばかりに、関をぞ三箇度作りける。

16 最後の三大合戦

17 一の谷、屋島、壇ノ浦

19 義経の働きと消えて行く変革者

20 坂落とし 《寿永三年》

21 これを始めて、秩父、足利、三浦、鎌倉、野井与、横山、党には猪俣、児玉、西党、都築党、
 22 私党の兵ども総じて、源平乱れあひ、入れかへ入れかへ、名乗り替へ名乗り替へ、馬の馳せち
 23 がつ音は雷の（か）とし、射違ふる矢は雨の降るに異ならず。

24 矢さけびの声、山を響かし、或いは薄手負ひ戦ふ者もあり、或いは手負ひを肩にひっかけ、

- 1 後ろへ引き退く者もあり。或いはひつくんで、差し違へて死ぬるもあり。或いは取つて押さへ
- 2 て首をかくもあり、かかるるもあり。いづれひまありとも見えざりけり。
- 3
- 4 かかりしかども、源氏大手ばかりでは、いかにも叶ふべしとも見えざりしに、七日の卯の刻
- 5 に、九郎御曹司、その勢三千余騎、ひよどり越えに打ち上げ、城郭はるかに見下しておはしけ
- 6 る所に、その勢にや驚きたりけん、牡鹿ふたつ牝鹿ひとつ、平家の城郭一の谷へぞ落ちたりけ
- 7 る。
- 8 兵ども大きに騒いで、「里近からん鹿だにも、我等に恐れて山深うこそ入るべきに、鹿の落
- 9 ちやうこそやすからね。いかさま上の山より敵落とすにこそ」とて、騒ぐ所に、伊予国の住人、
- 10 武知武者所清教進み出でて、「何者にてもあらばあれ、敵の方より出で来たらんずるものをあ
- 11 ますべきやうなし」とて、牡鹿二つ射留めて、牝鹿をば射でぞ通しける。越中前司これを見て、
- 12 「詮なき殿ばらの鹿の射やうかな。ただ今の矢一すぢでは敵十人をば防がんずるものを。罪つ
- 13 くり矢だうなに」とぞ制しける。
- 14 さるほどに御曹司、「馬ども少々落といてみん」とて、鞍置馬ども十匹ばかり追ひ落とさる。
- 15 或いは相違なく落ちて行くもあり、或いは足打ち折り、転んで死ぬるもあり。その中に、鞍置
- 16 馬三匹、越中前司が屋形の上落ち付いて、身みぶるひしてこそ立つたりけれ。
- 17 御曹司、「馬どもは主主が心えて落とさんずるには、損ずまじかりけるぞ。重ね落とせ、義経
- 18 を手本にせよ」とて、まづ三十騎ばかり、真つ先かけて落とされければ、大勢みな続いて落と
- 19 しける。後陣に落とす人の鎧の鼻は、先陣の鎧甲に当たるほどなり。
- 20 小石まじりの真砂なりければ、流れ落としに二町ばかりざつとおといて、壇なる所にひかへた
- 21 り。それより下を見下ろせば、大磐石の苔むしたるが、つるべおろしに十四五丈ぞくだつたる。
- 22 後ろへ取つて帰すべきやうもなし。また前へ落とすべしとも見えざりければ、兵ども、「こ
- 23 こぞ最後」と申して、あきれてひかへたる所に、三浦の佐原十郎義連、進み出でて申しけるは、
- 24 「三浦の方で、我等は鳥一つたてても、朝夕かやうの所をば馳せありけ。これは三浦の方の馬

- 1 場よ」とて、真つ先かけて落としかれば、大勢みな続いて落とす。あまりのいぶせさに、目を
- 2 ふさいでぞ落としける。ゑいゑい声を忍びにして、馬に力をつけて落とす。おほかた人のしわざ
- 3 などは見えず、ただ鬼神の所為とぞ見えたりける。
- 4 落としもはてねば、鬨をどつとつくる。三千余騎が声なれども、山びここたへて十万余騎と
- 5 ぞ聞こえける。
- 6 村上判官代康国が手より火を出だして、平家の屋形仮屋をみな焼き払ふ。折節風ははげしし、
- 7 黒煙おしかけたり。
- 8 平家の兵ども、もしや助かると、前の海へぞ多く馳せ入りける。汀には助け船どもいくらも
- 9 ありけれども、船一艘に物の具したる者ども四五百人、千人ばかりこみ乗らうに、なじかはよ
- 10 かるべき。汀より三町ばかり漕ぎ出でて、目の前にて大船三艘沈みにけり。その後は、「よき
- 11 人をば乗するとも、雑人どもをば乗すべからず」とて、太刀長刀にてながせけり。かくする事
- 12 とは知りながら、乗せじとする船に取りつきつかみつき、或いは肘うち切られ、或いは腕うち
- 13 落とされて、一の谷の汀に、朱になつてぞなみ臥しける。
- 14
- 15 敦盛の最後
- 16 一の谷の戦破れにしかば、武蔵国の住人、熊谷次郎直実、
- 17 「平家の公達の助け船に乗らんとて、汀の方へや落ち給ふ事もやおはすらん、あはれよき大将
- 18 軍に組まばや」とて、磯の方へ歩まする所に、練貫に鶴縫うたる直垂に、萌黄（もよぎ）匂ひ
- 19 の鎧着て、鍬形うつたる甲の緒をしめ、金（こがね）作りの太刀をはき、二十四さいたる截生
- 20 （きりふ）の矢負ひ、滋籐の弓持つて、連銭葦毛なる馬に、金覆輪（きんぶくりん）の鞍置い
- 21 て乗つたる武者一騎、沖なる船に目をかけて、海へぎつとうち入り、五六段（たん）ばかりぞ
- 22 泳いだるを、熊谷、「あれは大将軍とこそ見参らせ候へ。まさなうも敵に後ろを見せさせ給ふ
- 23 ものかな。かへさせ給へ」と、扇を挙げて招きければ、招かれて取つて返し、渚（なぎさ）に
- 24 打ち上がらんとし給ふ所に、熊谷波うちぎはにて押し並べ、ひつ組んで、どうど落つ。

- 1 取つて押さへて首をかかんと内甲を押しあふのけて見ければ、年の齡十六七ばかんなるが、
- 2 薄化粧して金黒（かねぐろ）なり。我が子の小次郎が齡ほどにて、容顔まことに美麗なり。
- 3 「そもそもいかなる人にてましまし候ふやらん。名乗らせ給へ。助け参らせん」と申しければ、
- 4 「かういふわ殿は誰ぞ」と問ひ給へば、熊谷「ものその数にては候はねども、武蔵国の住人、
- 5 熊谷次郎直実」と名乗り申す。
- 6 「さては汝がためにはよい敵ぞ。存ずる旨あれば名乗る事はあるまじ。名乗らずとも首をとつ
- 7 て人に問へ。見知らうずる」
- 8 とぞ宣ひける。
- 9 熊谷、「あつばれ大將軍や。この人一人討ち奉るとも、負くべき戦に勝つ事もよもあらじ。
- 10 また討ち奉らずとも、勝つべき戦に負くこともよもあらじ。我が子の小次郎が薄手負ひたる
- 11 をだにも、直実は心苦しう思ふぞかし。この殿の父、討たれ給ひぬと聞いて、いかばかりかは
- 12 歎き給はんずらん。あつばれたすけ参らせばや」と思ひて、後ろをかへりみたりければ、土肥、
- 13 梶原五十騎ばかりで続いたり。
- 14 熊谷、涙をはらはらと流いて、「助け参らせんと存じ候へども、味方の兵（つはもの）ども
- 15 雲霞のごとくに候へば、よものがし参らせ候はじ。同じくは、直実が手にかけて奉て、後の御孝
- 16 養（おんけうやう）をこそつかまつり候はめ」と申しければ、「ただ何さまにも、とうとう首
- 17 をとれ」とぞ宣ひける。
- 18 熊谷あまりにいとほしくて、いづくに刀を立つべしとおぼえず、目もくれ心も消え果てて、
- 19 前後不覚におぼえけれども、**さてしもあるべき事ならねば、泣く泣く首をぞ掻いてんげる。**
- 20 「あはれ弓矢とる身ほど口惜しかりける事はなし。武芸の家に生まれずは、何とてかただ今か
- 21 かる憂き目をば見るべき。情けなうも討ち奉るものかな」とかきくどき、袖を顔に押し当てて、
- 22 さめざめとぞ泣きるたる。
- 23 ややあつて、鎧直垂をとつて首をつつまんとしけるに、錦の袋に入れたりける笛をぞ腰にさ

- 1 されたる。
- 2 「あないとほし、この暁城の内にて、管弦し給ひつるは、この人々にておはしけり。当時味方に東国より上つたる勢何万騎あるらめども、戦の陣へ笛持つ人はよもあらず、上臈はなほもやさしかりけり」とて、これを**大將軍（九郎義経）の見参（げんざん）**に入れたりければ、見る人涙を流しけり。
- 6 後に聞けば、修理大夫（だいぶ）経盛の子息大夫敦盛とて、生年十七にぞなられける。それよりしてこそ、熊谷が発心の心は進みけれ。
- 8 件の笛は、祖父忠盛、笛の上手にて、鳥羽院より下し給はられたりしが、経盛相伝えられたりしを、敦盛器量たるによつて、持たれたりけるとかや。名をば小枝（さえだ）とぞ申しける。
- 10 狂言綺語の理と言ひながら、遂に讚仏乗の因となるこそあはれなれ。
- 12 《幸若舞『敦盛』より》
- 13 人間五十年、化天の内を比らぶれば、夢幻のごとくなり。一度生を受け、滅せぬ物のあるべきか。これを菩提の種と思ひ定めざらんは、口惜しかりき次第ぞと思ひ定め、急ぎ都に上りつつ、
- 15 敦盛の御首を見れば、もの憂さに、獄門よりも盗み取り、我が宿に帰り、御僧を供養し、無常
- 16 の煙となし申す。
- 17
- 18 『太平記』
- 19 《後醍醐天皇》
- 20 此時の帝、後醍醐天皇と申せしは、後宇多院の第二の皇子、談天門院の御腹にて御座せしを、
- 21 相摸守が計ひとして、御年三十一の時、御位に即奉る。御在位之間、
- 22 内には三綱五常の儀を正して、周公孔子の道に順ぐ、
- 23 外（ほか）には万機百司の政怠り給はず、延喜天曆の跡を追れしかば、
- 24 四海風を望んで悦び、万民徳に帰して楽む。

1 凡ての諸道の廃れたるを興し、一事の善をも賞せられしかば、寺社禅律の繁昌、ここに時を
2 得、頭密儒道の碩才も、皆望みを達せり。

3 誠に天に受たる聖主、地に奉ぜる明君也と、其の徳を称じ其の化に誇らぬ者は無かりけり。

4

5 《新関留めらる》

6 《飢民救済》

7 《自ら訴訟に当たる》

8 《まとめ》

9 誠に理世安民の政、若し機巧に付いて是れを見ば、命世亜聖の才とも称しつべし。

10 惟だ恨らくは斉（せい）の桓覇を行、楚人弓を遺（わす）れしに、叡慮少しく似たる事を。

11 是れ則ち草創は一天を合はすと雖も、守文は三載を越えざる所以なり。

12

13 《楠木との出会い》

14 《夢》所は紫宸殿の庭前かと覺えたる地に、大いなる常葉木ありて、緑陰茂りて南へ指した

15 る枝ことに栄え蔓れり。その下に三公九卿位によつて列座す。南へ向きたる上座に御座の畳を

16 高く布きて、いまだ座したる人もなし。主上御夢心治に、「誰を設けんための座席やらん」と

17 怪しみ思し食して、立たせ給ひたるところに、鬢結ふたる童子二人忽然として来たつて、主上

18 の御前に跪き、泪を袖に懸けて申しけるは、「一天下の間に、しばらくも御身を蔵すべき所候

19 はず。ただしあの木陰に南へ栄えたる枝の下に座席あり。これ御為に設けたる玉宸にて候ふ。

20 しばらくこれに御座候へ」と奏して、童子は遙かの天に登り去りにけり。

21 「もしこの辺に楠と謂へる武士やある」と御尋ねありければ、

22 （中略）

23 「河内国金剛山の西にこそ、楠多聞兵衛正成とて、弓矢を取つてさる物ありと人にも知ら

24 れたる者は候ふなれ。」

- 1 (中略)
- 2 主上具に聞こし食(め)して、「さては今夜の夢の告げはこれなりけり」と思し召しければ、
- 3 やがて正成(まさしげ)をぞ召されける。
- 4 《夢とあわい》
- 5
- 6 《楠木の提案》
- 7 「東夷近日の大逆、只天の譴(せめ)を招き候上は、衰乱の弊(つひ)へに乗て天誅を致され
- 8 んに、何の子細か候べき。
- 9 但し天下草創の功は、武略と智謀とに二つにて候。
- 10 若し勢を合せて戦はゞ、六十余州の兵を集めて武蔵・相摸の両国に対すとも、勝つ事を得が
- 11 たし。
- 12 若し謀を以て争はゞ、東夷の武力只利を摧(くだ)き、堅(けん)を破る事、欺くに易くし
- 13 て、怖るゝに足ぬ所也。
- 14 合戦の習にて候へば、一旦の勝負をば必ずしも御覧すべからず。
- 15 正成一人未だ生きて有りと聞こし召し候はゞ、聖運は遂に開くべしと思し食され候へ」
- 16
- 17 《赤坂城の戦い(一)》
- 18 寄手(よせて)いよいよ氣に乗って、四方の屏(へい)に手をかけて、同時に超えんとしけると
- 19 ころを、元来(もとより)二重に塗って、外の屏をば切り落す様に拵(こしら)へたりければ、城
- 20 の中より四方の屏の釣縄(つりなは)を、一度に切つてぞ落しける。
- 21 屏に取り付きたる兵ども千余人、推(お)しに打たれたる様にて、目ばかり動(はたら)くとこ
- 22 ろを、大木・大石を抛(な)げ懸け抛げ懸け打ちける間、寄手また今日の軍にも七百余人は討た
- 23 れにけり。

1 《偽装自書》

2 城中に大いなる穴を二丈ばかりに掘りて、この間多く討つたる死人どもを二、三十人、かの
 3 穴に取り入れて、その上に炭薪を積み置いて、雨風降り連く夜をぞ待ちたりける。
 4 楠が運や天命に叶ひけん、吹く風にはかに沙を揚げ、降る雨篠を突くが如くなり。夜色窈冥
 5 として、氈城皆帷幕を低れたり。これを待つところの夜なりければ、城中に人を一人残し留め、
 6 「我等が四、五丁も落ち伸びぬらんと思はん時、城に火をかけよ」と、謂ひおきて、皆物具脱
 7 いで持たせて、寄手に交れて、敵の役所の前、軍勢の枕の上を越えて、閑々ところ落ち行きけ
 8 れ。

9 事に臨んで恐れ、謀(はかりごと)を好みてなすは勇士のするところなり。

10

11 《前時代の武士、嘲笑される》人見四郎、本間九郎

12 赤坂城の近く成りければ、二人の者共、馬の鼻を双(なら)べて懸け驤(あがり)、堀の際
 13 まで打寄せて、鎧(あぶみ)踏ん張り弓杖(ゆんづえ)突いて、大音声を揚て名乗けるは、

14 「武蔵国の住人に、人見四郎入道恩阿、年積て六十七(七十三)、相摸国の住人本間九郎資
 15 貞(すけさだ)、生年三十七。鎌倉を出でし初めより、軍(いくさ)の先陣を懸けて、尸(か
 16 ばね)を戦場に曝(さら)さん事を存じて相ひ向へり。我と思はん人々は、出合つて手なみの
 17 程を御覽ぜよ。」と声々に呼ばはつて、城を睨(にら)みて引へたり。

18 城中の者共是を見て、「是ぞとよ、坂東武者の心猛きとは。ただこれは熊谷・平山が一谷の
 19 先懸けをつらやましと思へる者共也。跡を見れば続く若党も見えず。溢れ者の不敵武者に跳(を
 20 ど)り合つて、命失つて何かせんぞ。只置いて事の様を見よ」とて、東西鳴りを静めて返事も
 21 せず。人見腹を立て、「早旦より向つて名乗れ共、城より矢の一をも射出さぬは、臆病の至り
 22 か、敵を侮るか、いで其の義ならば手柄の程を見せん。」とて、馬より飛び下て、堀の上なる
 23 細橋さらさらと走渡り、二人の者共出し屏の脇に引き傍(そ)うて、木戸を切落さんとしける

- 1 間、城中是に騒ぎで、土小間・櫓（やぐら）の上より、雨の降るが如くに射ける矢、二人の者
- 2 共が鎧に、蓑毛（みのげ）の如くにぞ立ったりける。
- 3 本間も人見も、元より討死せんと思ひ立つたる事なれば、何かは一足も引くべき。命を限に
- 4 二人共に一所にて討られにけり。
- 5

6 【楠木正成の死】《楠木正成の提案》

- 7 「尊氏卿九州の勢を率して上洛候なれば、定めて雲霞の如にぞ候らん。御方の疲れたる小勢
- 8 を以て、大敵に懸け合はせ、尋常（よのつね）の如くに合戦を致し候はゞ、御方決定打ち負ぬ
- 9 と覚へ候。あはれ：（正成の提案が書かれる…略）合戦は始終の勝ちこそ肝要にて候へ。能々
- 10 叡慮を廻らされ、公議を定めらるべくにて候ふらん」と申しければ、「誠に軍旅の事は兵に讓
- 11 る」と、諸卿僉議有けるに重て坊門宰相清忠申されけるは、
- 12 「いまだ戦はざる前に、帝都を棄てて、一年の中に両度まで山門へ臨幸ならん事、且は帝位輕
- 13 きに似たり。（中略）たとひ尊氏九州勢を卒して上洛すとも、去春東八箇国を随へて上る時の
- 14 勢にはよも過ぎじ。戦ひの始めより敵軍敗北の時に至るまで、御方小勢なりといへども、毎度
- 15 大敵を責め靡くる事、これ全く武略の勝れたるに非ず。ただ聖運の天に合へるところなれば、
- 16 今度もまた何の子細かあるべき」
- 17 主上げにもと思し食し、重ねて正成罷り下るべき由を仰せ出だされければ、
- 18 正成「この上はさのみ異議を申すに及ばず、さては討死仕れとの勅諭なれ」
- 19
- 20 **【あわいの時代のリーダーとは】**
- 21 弱いリーダー、無為のリーダー
- 22 「あわいの時代」に求められること
- 23 既存の対抗勢力が持っている権益を求めないこと
- 24 眼前の出来事に一喜一憂しない、遙か遠くを眺める

1 文化とは 義満 綱吉

2 賁 

3 賁（ひ）は亨る。小しく往く攸有るに利し（賁亨。小利有攸往。）。

4 《象傳》

5 賁は亨るとは、柔來りて剛を文（かざ）る。故に亨る。剛を分ちて上りて柔を文る。故に小しく往く攸有るに利し。

7 剛柔交々錯するは天文なり。文明にして以て止まるは人文なり。

8 天文を觀て、以て時變を察し。人文を觀て、以て天下を化成す。

9 （賁、亨。柔來而文剛、故亨。分剛上而文柔、故小利有攸往。（剛柔交錯）天文也。文明以止、

10 人文也。觀乎天文、以察時變。觀乎人文、以化成天下。）

11

12 舍利殿（金閣）…北山第

13 一階は貴族的な寢殿造風 二階は武家の書院造風 三階は禪宗様式風。

14

15 六五。丘園に賁る、束帛綈綈（少ない）たり。吝なれども終には吉。

16 （賁于丘園、束帛綈綈、吝、終吉）

17

18 ●『耳なし芳一』と宝塚歌劇『桜嵐記』楠木正行